

青空に

市村 涼香

四月になり冬眠していた生物が暖かさに目を醒ましたとはいえ、夜でも蒸し暑くじめじめとした雰囲気の夏と比べると、一日中暖かいと言いつらい日々が続いている。

—その中で、私は高校二年生へと進級した。進級したというのにいまだに実感が湧かないのは多分、私が学校に行っていないからだろう。今日こそは来てくれと担任に懇願され、仕方なく数カ月ぶりの制服に袖を通した。久しぶりに着た制服は窮屈で仕方がない。入学する前、母親と一緒に制服の採寸に行った時は早く着たいと、遠足前の子供のように制服を着ることを楽しみにしていたのに、今ではその制服を着るのが苦痛で仕方がない。少しだけ奮発して買ったローファーはサイズが合わず、私の踵を締め付けている。

「履きなれたらピッタリになるよ」と母は言ったが、ピッタリになる前に私が学校に通わなくなるなんて思っていなかっただろう。

「学校に行きたくない」

ある日の夕食、ぽつりと零した私の言葉を母親は聞き逃さなかった。すぐに、理由を問い詰められたが、私は答えることが出来なかった。あの日の母親の狼狽えた瞳は忘れられない。

理由なんてものは単純で、ただなんとなく、行きたくないなと思ってしまっただけ。まさか自分でも言葉となって現れるとは思っていなかった。だが母親は私の言葉を思った以上に事態を重く受け止めて私に優しくしようとなつてくれた。きっと私が学校でクラスメイトにいじめられでもしているのだと考えたのだろう。それを担任に聞くともしなかったし、私を無理に学校に行かせようとはしなかった。そんな母親に甘えていたらいつの間にか二年生へと進級してしまっていたのだ。母親のことを騙している罪悪感はあるが、それ以上に自由というものが楽しくて仕方がなかった。いつの間にか勝手に私は縛られていると勘違いしていたのだろう。その縛りから解放された

ことが嬉しかったのだ。

だが、学校に在籍している以上、自由というのは思ったより少なく単位が出席日数
がと担任からの連絡が来る。最初の方は無視していたが、「さすがに明日は来ないや
ばいぞ」と若くない担任が若者言葉で訴えかけて来たため、私は重い腰を上げ着たく
もない制服に身を通した。

八時三十分、ショートホームルームギリギリに登校した私は、教室の扉の前に立っ
ていた。無駄に歴史があるせいでいたるところにガタがきている校舎は歩く度に床が
軋む。その音が私の存在を歓迎していないように聞こえて居心地が悪い。緊張からな
のか、心臓がどくりどくりと脈打っている。なんとなく行きたくないなど思っていた
だけなのに、いつの間にか学校へ行くことが苦痛に置きかわっていたことに気づいて
ため息を零した。

クラスが替わるのは三年生の一回だけ。教室も変わることがないから進級してみん
ながよろしくね、と挨拶しているようなやり取りが教室の中で行われていないことは
明らかだ。みんな私の事を知っているということが、私がこの扉を開きたくないと思
じる要因になっている。たった一枚の隔たりをこえられないのは私がこの扉の先の空
間に恐怖を抱いているのだろう。先程のため息で少しだけ落ち着いた心臓に安心し、
私は扉を開けた。

鈍い音を鳴らしながら扉を開く。その音に反応するようにクラスメイトの視線が一
気に私に突き刺さった。その目からは困惑と驚きを感じ取れる。当たり前だ、数カ月
前になんの脈絡もなく突然学校に来なくなった同級生が現れたのだ。静まり返った教
室は居心地が悪く視線が体を蝕んでいく。その時間があまりにも長く感じられたが、
次第に私への興味を失ったのだろう、私が教室に入る前の空気に戻っていった。

視線から解放され、ほっと胸を撫で下ろすと、タイミングよくショートホームルーム
まであと五分を告げるチャイムが鳴った。

いつまでも扉の前に立ち尽くしてはいけなないと思い、自分の席を探す。以前私

の席だった場所にはあまり仲良くない女の子が座っていた。きつと席替えをしたのだろう。私の席はどこかと探していると、クラスの人数が奇数のため一つだけ飛び出した窓際の一番後ろの席の引き出しからプリントが飛び出していたため私の席だろうとその席に座った。

席につくと同時に、教室の前の扉が開かれ担任が入ってきた。いつもはジャージを着て髪の毛も乱れたまま、無精髭だって生やしていたのに今日は、スーツに身を通し髪の毛もワックスで整えられている。無精髭も生やしておらず、教師らしい姿をしていたが、欠伸をする姿はいつもの担任のままだった。

私のことをちらりと見た担任は、目を丸くしていた。ほぼ毎週電話をしても家から出ることのなかった私が来たのだから当たり前だろう。心なしか、私の名前を呼ぶ声に安心が感じられた。

「今日は連絡だけだから午前中には帰れるぞ」その言葉を聞いて周りから歓喜の声が湧く。静かにしろという声に落ち着きを取り戻した。

それからは事務的に連絡が伝えられた、話が長い担任に期待はしていなかったが本当に午前中に終わったのは驚いた。

私も帰ろうと荷物を手に取り、教室を後にしようとする、後ろから声をかけられた。「斉藤はこのあと、保健室寄ってくれ。先生が待ってるから」

私が嫌そうな顔をしてしまったのだろう。「ちゃんと行けよ」と釘を刺されてしまった。渋々「わかりました」と返せば、満足したのか担任はそのまま教室から急ぎ足で出て行った。呼び止められたせいで教室には既に私以外誰もおらず、先程までの騒がしさが嘘のように静まっていた。私も帰ろうか考えたが、ちゃんと行けよと釘を刺されて無視できるほどメンタルが強い訳でもない、大人しく保健室へ向かった。

三回ノックをし、反応を待つが一向に反応が返ってこず、不安になりながら扉を開けると、案の定先生はおらずツンとした消毒液の匂いが鼻に届いた。白を基調とした空間は学校の中でも珍しいため、少しだけ特別のように感じる。閉められたカーテン

に薬品が積まれたラック。中央には赤色のテーブルクロスを敷かれた机がぼつんと置かれていた。

部屋を見回しても人がいる雰囲気はない。待っていると喋っていたのに居ないのはどうなのかと思ったが、担任が急ぎ足で出ていったことを思い出し、きっと職員会議か何かをしているんだろうと自己完結した。職員会議がどれぐらいかかるのかもわからないし立ちっぱなしはきつい。待たされているのだ、座るのも許してくれるだろう。丸椅子とキャスター付きの椅子があったが背もたれが着いているキャスター付きの方を引いた。キャスターが転がる音と一緒にキィと甲高い金属音が耳に響き顔を顰めた。

「うるさ」

「えっ」

誰もいないと思っていた空間から急に人の声が聞こえ、思わず声がでる。閉められたカーテンの向こうに誰かいるのだろう。カーテンの向こう側から布団の擦れる音が聞こえる。久々の登校だったから、保健室のカーテンは利用者がいる時は閉められていることがすっかり頭から抜け落ちていた。何が起きるのか、不安になりながら音が聞こえた方に体を向けるとカーテンが音を立てて開いた。

「は？ 誰」

カーテンから顔をのぞかせた男は、私の姿を訝しげに見つめた。

夏の青空を閉じ込めたような水色の瞳に夜空を縫いつけたような黒髪に一瞬で目を奪われた。男の動きに反応するかのように、先程まで雲がかかっていた太陽が姿を現して、保健室に光が差し込んだ。その光が男の黒髪を透して星屑のように煌めいていた。

その姿が世界中のどの絵画や彫刻よりも綺麗で男の周りだけ時間が止まったような気分だった。じっと見つめていたのがいけなかったのか、男はごほんどわざとらしい咳をした。はっと意識を引き戻した私は何か男に対しての情報はないかと辺りを見渡す。すると、ベッドの足元に上履きが置かれていることに気づいた。ネクタイが外されていて学年がわからなかったが、上履きの色が青色のため、三年生である事がわか

った。

「す、すみません」

「二年？」

「え、あ、そうです」

私の返答を聞いて満足をしたのか「ふうん」と呟き、カーテンの奥へと引っ込んでいった。閉じられたカーテンの中から布団の擦れる音が聞こえたためまた眠るのだろう。

白い空間に取り残された私はうるさい心臓に蓋をするように丸椅子に座り直した。つかの間「ごめーん」と気の抜けた声とともに一人の女が保健室に飛び込んできた。

「待たせちゃったね、ごめんなさい」

「あ、いえ、そんなに待っていないので」

急いで来たのだろう、少しだけ髪の毛が跳ねている。私と目を合わせようと顔をこちらに向けるが顔を背けてしまった。それに気づいたのか、無理に目を合わせるわけでもなく私と向かい合わせで座ることが出来る位置にあるキャスター付きの椅子を引いた。金属音が鳴るか少しだけ身構えていたのに、鳴らずにすっと引かれた。私の隣にあるものだけが古いものだったのだろうか。

「あ、そうだ。話っているのはね、保健室登校しない？ っていうお誘いなんだけど、無理にとは言わないから、どうかしら？」

保健室登校。長期休みの生徒の復帰を支援するための制度だというのは以前、私に学校に来いと口煩く言い続けていた担任が言っていたため知っている。

「ずっと、その、先生と一緒にいるってことですか？」

「本当はそうしないとダメなんだけど、やることが沢山あるからほぼ一人、あつ、もう一人いるから二人でいることになると思うわ」

もう一人。私の考えているものがあっていれば、もう一人というのはカーテンの向こうで二度寝を楽しんでいるであろう、あの先輩である。

少しの期待を孕みながら私は先生の方を見つめた。それに気づいたのか、先生は嬉

しそうに口を開いた。

「ああ、えっとねえ今ベッドで寝ている子。あなたよりひとつ上。先輩ね」

やっぱりそうだ。あの、綺麗な先輩と少しだけでも近づけるなら。あの青空に私がうつるなら。ベッドの中から聞かれていたら嫌われてしまうかもと考えた私は、熱を帯びた頬を抑え、少しだけ弾む声を隠しながら口を開いた。

「ひとりじゃないなら、保健室登校、したいです」

■

春から夏へと季節は移り、一日中蒸し暑い日々が続いている。あと少しで夏休みだというのに少しだけ寂しい気持ちがあるのは、私がこの場所に居続けたいと思うようになったことに関係しているのだろう。

四月のあの一件から、私はあの男——白井翔太と交流を深めていた。

「白井先輩」

「ん？ なに？」

白を基調とした空間に私と先輩の声が薬品に混ざって溶けていく。机に突っ伏していた体を起こすと、保健室にだけ許されたエアコンの風が私の肌を撫ぜた。

私のクラスは今プールの授業をしているらしい。六時間目のプールなんて、私からしてみれば苦痛でしかないが、クラスメイトからしてみれば楽しいことなのだろう。外からは授業らしからぬ楽しそうな声が聞こえてくる。ちらりと時計を見れば、授業終了の十分前だということがわかった。自由時間かと自己完結し、少しだけでもやっておくようにと渡された課題から手を離し、カーテンの向こうにいる先輩の方へ体を向けた。

「先輩は夏休み何するんですか？」

私がこの場所に居続けたいと思う理由であり、教室に戻らない理由である人。私は、四月からこの男に心を奪われているのだ。この気持ちが恋だと気づいたのは保健室登校を初めてから一週間がたった頃だった。たまたま先生が留守にしていたときに

カーテンを開けて出てきた先輩を見て、初めて見た時のように目を奪われてしまったのだ。その日も先輩はわざとらしい咳をしたが、「あの時の」と呟いた声は以前よりも優しく感じられた。

「夏休みねえ、何しようか。結衣ちゃんは？」

結衣ちゃん、と呼ぶ声に心臓が少しだけ跳ねる。名前で呼ばれた程度で喜んでしまう体はまるで小学生のようだ。

「夏祭り、いこうと思ってます」

「へえ」

聞いたくせに興味がなさそうな声に少しだけ笑みがこぼれた。私が笑ったのが気に入らなかったのか、先輩は「笑うなよ」と頬をふくらませたような声で呟いた。

先輩と仲良くなって知ったことは沢山ある。あまり人の話に興味がないこと、出席日数がギリギリだということ、彼女がいないこと。最後の彼女がいないことについては「いないよ」と言われた時に驚きすぎて筆箱を落としてしまい、先輩は音から逃げるように布団を被っていた。

「先輩はいかないんですか？夏祭り。もし暇だったら、その、一緒に行きませんか？」

少しだけ勇気を振り絞って伝えた言葉は自分が想像していたよりも震えていた。変な汗が背中からじわりと滲み出ているのを感じる。先輩からの返事が少しだけ怖い。断られるとわかっているはずなのに、頭の中で少しだけ期待している自分がある。うんと唸りながら先輩が身動きしているのがカーテン越しに伝わった。

「俺、夏ばあちゃんのところ行くからごめん」

「おばあ、ちゃん」想像と違った返答に一瞬固まってしまったが、笛の音が外から聞こえ体を動かす。いつの間にかプールから楽しい声が消えていた。ちらりと時計を見直すと、授業終了のチャイムが鳴る一分前だった。

「大丈夫、です！」

無理して作った元気な声は授業終了を告げるチャイムに吸われていった。

軽快な音楽とともに熱を帯びていた体から少しずつ熱がひいていくのを感じる。

夏休みが始まってはや数週間。私は日課のウォーキングのためにコンビニに来ていた。あれほど嫌だと思っていた夏休みが始まってしまい、学校から出された課題を一週間足らずで終わらせてしまった私は本格的に手持ち無沙汰になっていた。するともないのでエアコンの効いた部屋で眠っていたが、エアコンの風が肌を撫ぜる度に、先輩との日々を思い出してしまい枕を涙で濡らしていた。会いたい。そう思えば思うほど、先輩のことで頭がいっぱいになって何も手につかない。考えたくない。と思う人は自然とその事を考えてしまうようでテレビから「うすい」という言葉が聞こえる度に過剰反応してしまい、ついには布団の擦れる音ですら、先輩のものと勘違いしてしまった。これでは良くない思い、夏休みが始まって二週間がたったある日、先輩のことを思い出したら家から三十分歩いた場所にあるコンビニエンスストアに、一時間かけて向かい、一時間かけて帰るというルールを自分に課した。これで少しは自制できるだろうと思っていたが、うまくいかず、今では日課になってしまっている。

いつも通り、水を取りに奥の方へ向かうと、見知った黒髪が視界に入った。青空を閉じ込めたような水色の瞳に夜空を縫いつけたような黒髪。間違いない。白井先輩である。手には革製の高そうな財布を持っていた。普段見ていた制服とは違い、ラフな格好をしている先輩を見るのは初めてで心臓が高鳴るのを感じる。その場で固まっていると、アイスクリームケースを覗いていた先輩が顔をあげてこちらを向いた。

「あれ？ 結衣ちゃん？なんでココに？」

驚きと疑問が混ざった表情と共に発せられた言葉に私は愛想笑いを浮かべた。ここに、というのは多分このコンビニエンスストアのことだろう。私は以前先輩に自分の家を伝えたことがある。明らかに伝えられた場所よりも遠いこのコンビニエンスストアにいるというのは先輩にとって不思議で仕方がないだろう。

「ウォーキング、ですかね」

「ウォーキング？なに？運動不足なの？」

「まあ、そんなところです」

先輩のことを考えてしまうから一時間かけてここに来てますなんて言える訳もなく、曖昧に濁していたら先輩も汲み取ってくれたのか、それ以上のことは何も聞いてこなかった。会話が終わってしまう雰囲気の流れで、会話を途切れさせたくて、何とか頭を捻った。

「あ、おばあちゃん元気でした？」

「え？ あー、うん。元気だったよ」

捻り出した話題は、広がることなく店内放送にかき消されて消えていった。先輩はいつの間にか買うものを選んでようアイスクリームケースの中から、アイスクリームを取り出しカゴへ投げ入れた。カゴの中には既にスナック菓子やジュースが入っており、カゴの底が見えなくなっていた。パーティーでもするのだろうか。

「それなら良かったです！」

その姿を見て水を買うことを思い出した私はリーチインショーケースの中からも買っていている天然水を取り出した。新発売と大きく書かれたジュースも気になったが、歩き疲れた喉には優しくない甘さをしていそうだったので断念した。特にこれといって買うものはないが先輩と少しでも一緒にいたいと思い、店中を探索する。チョコレートの新作かアメを買おうかと迷ったがここで買うと夏の暑さに負けて溶けてしまうだろう。結局水しか買いたいものが見つからず、レジへ向かうとちょうど先輩がレジを通していた。

隣のレジで会計を済ませ、先輩の後ろを通る。挨拶を忘れていたことを思い出し振り返ろうとすれば、「ちょっと待って」と声をかけられた。その言葉に出口へ向けていた体を先輩の方へ向ける。

「これ、あげる」

差し出された先輩の手には、先程購入を断念したジュースが握られていた。ラベルに書かれた甘さたっぷりとりいちこの文字と丸いフォントがこのジュースの甘さを物語ってる。

「え、いいんですか？」

「うん。運動してる結衣ちゃんへのご褒美」

「ありがとうございます」

「じゃあね」

私がジュースを受け取ると先輩はレジの方へと体を戻した。店員の「ありがとうございます」「ありがとうございました」の聲が耳に届く。先輩から貰ったジュースがぬるくならないように小走りで家へ帰った。

■

むせ返るような暑さが少しだけ緩和された九月。クラスメイトは体育祭のダンスの練習や応援団の練習をするなか、体育祭に参加しない私はいつも通り学校生活を楽しんでいた。

先輩ともこれまで通り交流を続けており、夏休みに先輩から貰ったジュースのお礼から始まり、今では勉強や進路の話もしている。

「おはようございます」

いつもなら「おはよ」と欠伸混じりの声が聞こえてくるのに今日は聞こえてこない。九月に入ってから先輩はあまり保健室に来なくなった。多分授業を受けないと出席日数が足りなくなってしまったのだろう。先生もいない保健室は寂しくて、自分だけしか世界に居ないような気持ちになってしまう。

丸椅子に座り、今日の分と可愛らしい丸文字で書かれたメモとともに積まれた課題を確認する。取り掛かろうと手をかけページを開くと「こほん」と乾いた咳が出た。夏よりも乾燥した空気のせいで喉が渴いていることに気づき、なにか買おうとスクールバッグの中から財布を取りだし自動販売機へ向かった。

一階の奥の階段横にある自動販売機。休み時間だというのに人がいないのは教室からのアクセスが悪いからだろう。この場所の他にもあまり人気ではない下級生の下駄箱横の自動販売機があるが、どちらかと言えばそっちの方が使われているような気が

する。

二百円を自動販売機に投入し、いつも通り天然水を買おうとボタンを探す。

「あ、ジュース」

あの日、先輩から渡されたジュースが新発売の文字とともに並んでいた。思わず天然水のボタンにかけていた指をジュースの方へと移す。その後飲んだ少しだけぬるくなったジュースは案の定甘ったるくて、喉を潤すには向いていなかった。少しの力を込めてボタンを押せばガコンと音を立てて自動販売機が揺れた。取り出そうと手をかけた瞬間、階段の上から足音が聞こえて思わず階段下の物置に体を隠してしまった。

「白井くん」

綺麗なソプラノからこぼれた「白井」という単語に思わず心臓が跳ねた。白井なんて名字、うちの学校には一人しかいない。私の想い人である白井翔太ただ一人だ。先輩をくん付けで呼んでいる所を聞くに、相手は先輩で間違いないだろう。埃っぽい物置の中で、体を折り曲げ口元を手で抑えて声を零さないように耐える。

「私、白井くんのこと好き」

その言葉にひゅっと息を飲んだ。静まり返った廊下に声が反響していく。

心臓がうるさいくらいに鳴っている。胃酸が上がって来たのか、心臓が飛び出そうとしているのか、口の中から飛び出してきたしまいそうなナニカを抑えるために口を抑えていた手に力を入れた。体の穴という穴からじわりと嫌な汗が滲む。先輩がどんな言葉を続けるのか、聞きたい気持ちと聞きたくない気持ちがせめぎあい、思わず目を固く瞑った。数十分にも数時間にも思われた沈黙は先輩の「ありがとう」の一言と休み時間終了を告げるチャイムの音で呆気なく破られた。上履きを鳴らしながら階段を駆け上がっていく音が聞こえ、私は折り曲げていた体を伸ばし、うるさい心臓を聞こえないフリをして、自動販売機からジュースを取り出し保健室へ向かった。

「どこ行ってたの？」

保健室の扉を開くと、キャスター付きの椅子に座った先輩が私のシャープペンシルを回しながらこちらを覗いていた。暇つぶしに使われたのだろう、机の上にはペンが

散乱している。

「飲み物買いに行ってみました」

手元にあるジュースを見せると「ふーん」と興味無さそうに呟いた。その姿はいつも見ていた先輩のそのもので、数分前に階段で告白されていたとはとても思えない様子だった。先輩の隣の丸椅子に腰を下ろし、課題に取り掛かろうと散乱したペンの中からシャープペンシルを取る。

「結衣ちゃんさ、なんでこっちに座んないの？」

キャスター付きの椅子の方が背もたれあって楽じゃない？と続ける先輩に

「丸椅子の方が好きだから？」と疑問形で返せばまた興味無さそうに「ふーん」と呟き立ち上がった。手に持っていたペンを机に置くと、カーテンの向こう側へと隠れてしまった。

私が丸椅子に座る理由は一つで、初めて先輩と会った時に「うるさい」と言われたからだ。それからずっと律儀に丸椅子に座り続けている。思えば、初めて出会ったときから私は先輩のことを考え続けているのだ。

「先輩、前に彼女いないって言ってましたけど、好きな人いますか？」

「いると思う？」

問いかけを返すように聞いてくる時は、これ以上聞いても何も教えないよという合図だった。思わず「でも、告白されましたよね」と零れそうになった言葉を飲み込んで、私は課題へと向き合った。

■

二月十四日、今日はバレンタインだ。あれから数カ月、先輩は学校に来ない日々が続いた。否、来てはいるのかもしれないが保健室に来なくなってしまった。様々な色で溢れていた私の日常は一変し、灰色の日常になってしまった。

数日前、久しぶりに保健室へ顔を出した先輩に「バレンタイン、来てくださいね」と伝えておいたため、来てくれるだろうと淡い期待を抱きながら私は課題を解いてい

た。手作りは受け取ってくれるようなタイプではないだろうと思い、それほど高くない市販のチョコレートを購入した。ラッピングは控えめに本命だとは悟られないようにして、ちらりと時計をみればいつも先輩が来る時間まで残り数分を切っていた。来る前に確認しようともう一度チョコレートを手に取った瞬間、保健室の扉が音を立てて開かれた。

「おまたせ。待った？」

「まっ、てないです」

後ろから聞こえた声に驚いて手に持ったチョコレートを落とすそうになるが膝が受け止めてくれた。もう遅いかもしいれないが、少しでも先輩の瞳に可愛くうつるよう前髪を整える。椅子から立ち上がり後ろを振り向くと、片手に紙袋を持った先輩が扉に寄りかかっていた。紙袋の中にはクラスメイトから貰ったのであろう綺麗な包装のお菓子が詰め込まれていた。用意したチョコレートよりも高そうなお菓子が多くチョコレートを持って固まってしまった。そんな私を先輩は不思議そうな顔で見つめた。

「それ、俺宛？」

「そうです」

「じゃあ、ちょうだい」手に持っていたチョコレートはいつの間にか先輩の手の中に収まっていた。一瞬だけ触れてしまった先輩の手の熱が私の右手を火傷させたように熱くさせている。このまま、流れで告白してしまおうかと口を開こうとすれば、先輩は私が次に言う言葉がわかっているかのように頬をかいだ。

「ごめんね」

「なにがですか」

「チョコレート、食べるの遅くなったら」

言いたいことはそんなことじゃないですよ。と悪態をつきそうになるのを抑える。先輩と仲良くなってもうすぐで一年がたつ。私が二年生先輩は三年生。先輩とは今年で会えなくなる。先輩が進学するのか就職するのか何も知らない。知らされてい

ないのだ。何を聞いてもはぐらかされる。深堀しないでと一線引かれる度に心臓がきゅつと締め付けられる。

「いいですよ、別に」

頬をふくらませていえば私を見つめる水色をより一層丸くした。

「あはは。じゃあ、結衣ちゃんまたね」

そのまま保健室から出ていこうとする先輩を呼び止めた。想像していたよりも大きな声が出てしまい先輩は驚きながら振り向いた。

「あの、次、いつ来ますか？」

「次？ そうだな、うーん、卒業式とか？」

「じゃあ、その日絶対来てください」

「結衣ちゃんの頼みならしょうがない。じゃあ卒業式で」

ヒラヒラと手を振りながら保健室を後にした先輩の後ろ姿を目で追う。あの紙袋の中に、あの日先輩に好きと伝えた人はいるのだろうか。もしいたとしたら、私のチョコレートはその中に埋まってしまうのだろう。勢いに任せて「先輩が好きです」と伝えてしまえばよかった。後悔しても、もう遅くいつの間にか先輩の後ろ姿はなくなっていた。

■
三月九日、今日は三年生の卒業式である。

数日前までは開いていなかった蕾も開き、綺麗な桜色を見せていた。クラスメイトは体育館で三年生の卒業を祝っているのだろうが私は一人、保健室で卒業式が終わるのを待っていた。

バレンタインから今日まで、私はどうやって先輩にこの気持ちを伝えようと考えていた。

先輩と会えるのは今日で最後である。連絡先も、進路も知らない私にとって先輩への気持ちを伝える最後のチャンスが今日なのだ。騒がしくなった廊下に気づき、扉か

ら顔を覗かせると視界をブレザーが覆った。胸元にある花を見る限り卒業生であろうと顔をあげると

「結衣ちゃん来たよ」と卒業証書を手に持った先輩が楽しそうに笑っていた。

「せん、ばい！卒業、おめでとうございます」

「ありがとうございます。泣いた？」

「見てないので泣いてません！」

先輩の目元と鼻先が赤くなっていたのですぐに泣いたのだろうと見当がついた。先輩はこういう場所で泣くタイプではないかと思っていたのに。

「それだけ？」

「え？」

「俺を呼んだの、おめでとうって言うだけ？」

もちろんそれだけな訳がない。約一年積み上げてきた気持ちを全て伝えてしまっているブレザーにはボタンがきっちり揃っていた。第二ボタンが貰えたらこの気持ちを伝えようと決心して唾液を飲む。

「第二ボタン、ください」

先輩は一瞬だけ考えたような顔をして、皺ひとつないブレザーの上から二番目、心臓が一番近い位置のボタンを一気に引き抜いた。糸がちぎれる音にビクリと肩を揺らせば、目の前にボタンを差し出された。

「どーぞ」

手の中にあるボタンは、特別なもののようにキラキラと輝いていた。そのボタンを受け取ると、心臓の奥深くが暖かくなって、私に勇気をくれているようだった。ふうと一息ついて、頭の中を整理する。四月から好きでした、私と付き合ってください。よし、これを言うだけ。うるさく脈打つ心臓に手を当てた。

「翔太くん、何してるの？」

綺麗なソプラノが鼓膜を揺らす。聞き覚えがある声に思わず顔をあげると、いつの

間にか先輩の隣には知らない女が立っていた。深い海のような黒髪が陶器のような白い肌をひときわ白く見せていた。卒業式で泣いたのか目元だけが赤く染っている。

「ん？ 後輩と話してんの」

「へえ、仲良い後輩いたんだね」

先輩にいっそう近づいたかと思えば、華奢な女の手が先輩の手に絡められた。それに嫌がる素振りも見せず先輩は壊れ物を触るかのように女の手を包み込んだ。思わず目を逸らす。先程とは別の意味でうるさくなった心臓が血管を通じて耳元からドクドクと音を鳴らしている。手が痺れて上手く動かせない。

「ううん、そんな仲良くない」

瞬間、うるさかった心臓が驚くほど静かになった。言葉を脳内で咀嚼しようとして固まる。固まってしまった理由を悟られたくなくて、わざと髪の毛を耳にかけた。

「そうなの？ あ、そうだ。みんなが集まるって言ってたよ」

「わかった。じゃあね、結衣ちゃん。ばいばい」

遠ざかっていく先輩の背中をぼうっと見つめる。振り向いてくれないかと視線を送っていれば女の方が振り返って優しく微笑んだ。その瞬間、堪えていた涙が頬をつたった。

私の何がダメだったんですか、告白していれば変わりましたか。背中はいつしか見えなくなつて校庭から拍手が聞こえてきた。私が丸椅子に座るようになったのは、先輩がうるさいと言ったからだし、夏休みに貰った甘ったるいジュースは私の一番好きな飲み物になった。先輩はこんなにも私を変えたのに、私では先輩を変えることはできなかった。先輩の彼女にはなれなくてもいいから先輩の一番仲のいい後輩になった。あの青空に私を映したかった。

無意識のうちに握りしめた拳がずきりと傷んだ。頬を伝った熱を拭い拳を開く。

「さいあく」

てのひらの中には、輝きを失った第二ボタンがぼつんと佇んでいた。